

○春01番の発句

物ものくものや時雨しぐれし空を春霞

不外

〈作者〉

作者の不外については、生没年ほか未詳。『俳諧江戸弁慶』（延宝八）・『俳諧向之岡』（延宝八）・『俳枕』（延宝八年）などに入集。

〈語注〉

- ・「はる霞」によって、春。
- ・「物く」 それぞれのもの。ここでは、「春霞」を春の到来を告げるもの、同じく「時雨」を冬の到来を告げるものとして「春と冬それぞれの」の意か。『袋草紙』にある慈覚大師の歌「雲の来て降る春雨はわかねどもあまのかきはおのがもの」を意識するか。

ものものの心根とはん月見哉

露沾『続猿蓑』（元禄二年）

物々よ花火おそれぬ涼み舟

笑種『花摘』（元禄三年）

- ・「時雨」 冬の季語。冬の初めに降る雨として詠まれる。

〈句解〉

「冬の到来を告げる時雨の降った空に、今日は春の到来を告げる霞がかかっていることだ。」

春と冬、それぞれの季節の到来を告げる代表的な季語である「霞」と「時雨」を重ね、季節の移り変わりへの感慨を込め、春の到来を寿いでいる。

※以下、春06番の句までの六句の並びについては『古今和歌集』など勅撰集の冒頭の部立てを意識したか、という意見が出された。

○春02番の発句

松とりて常の朝日と成なりにけり

不角

〈作者〉

作者の不角は、江戸住。寛文二年（一六六二）〜宝暦三年（一七五三）、九二歳。立羽氏。通称、定之助。不卜門。『俳諧談林一句』（天和三）などに入集、『蘆分船』（元禄七）・『一峠』など編。『続の原』には句合の部に、春三番右句、夏十一番左句、秋三番右句、冬五番右句の計四句。発句の部に十句入集。

〈語注〉

- ・「松とり（松とる）」によって春。「松とる」は正月の間飾っておいた門松を取り払う

こと。「かどまつ取る」「松納」などともいう。時期は四日、六日、七日、十五日など地域により異なるが、「松七日」という言葉があることから、七日に取り払うことが通常か。江戸では寛文二年の町触れに「松飾り七日朝取可申事」とあり、以後同様の触れが繰り返された。『守貞漫稿』に「京阪ともに十五日に門松・注連縄を取り除くなり。江戸も昔は今日なり。大阪は門松・注連縄の類を諸所川岸等に集め積み、十六日の暁前にこれを焚きて、左義長の義を表す」とあるので、京阪では十五日に取られていたと思われる。門松を取り払う日には地域差があるが、次に並ぶ春03の句に芹摘みが詠まれていることを考えると、十五日を待たず、六日から七日の朝の様子を詠んだものと考えるのが良いか。

松とりて春まだ浅き大路かな

綺石『新類題発句集』（寛政五年）

・「朝日」 朝の太陽、朝方の日。俳諧においては「松」と「朝日」の取り合わせはよく見られる。

松陰や旭見に行く春の海

不卜『続虚栗』（貞享四）

赤松に照つく夏の朝日哉

水尺『国の花』（宝永元）

### 〈句解〉

「正月も七日となったので、飾っていた門松を取り払った。すると正月の間はめでたいものであった朝日も、通常のものとして感じられるようになったことだ。」

門松を取り払うことで正月を終え、日々が通常のものに戻ったことを詠んだ句。

※「松」には和歌に詠まれる「初子の小松」が意識されているのではないか、との意見があった。

### ○春03番の発句

古澤の芹はいつもの句ひかな

コ齋

### 〈作者〉

作者のコ齋については、生年未詳、元禄元年（二六八八）七・二二没（『花摘』）。小川氏。通称、徳右衛門。別号、野水。蕉門。『続の原』には句合の部に、春一番右句、夏八番左句、秋六番右句、冬三番左句の四句、発句の部に三句入集。

### 〈語注〉

・「芹」によって、春。「芹」は春の七草のひとつ。「芹摘み」は冷たい春風に吹かれながら芹を摘む野遊びの一種。

### 〈句解〉

「冬の間は緑のなかった沢に春になって生えた芹が、いつも通りの瑞々しい香りをさせていることだ。」

冬の間、静まり返っていた古い沢に生い茂る芹の香りに春のおとずれを感じている。生い茂る芹の瑞々しさを、香りで表現した点が妙。『続の原』には、他に春一番の句合

が「芹」を題として詠まれており、ユ斎は右の句に「嬉しさにいらぬ程摘根芹かな」の句を詠んでいる。

### ○春04番の発句

笑はれてまた打直す齋かな

景道

#### 〈作者〉

作者の景道については、生没年ほか未詳。『続虚栗』（貞享四）・『四季千句』（元禄二）・『いつを昔』（元禄三）などに入集。

#### 〈語注〉

・「齋打つ」によって、春。「齋打つ」は春の七草を調理するために、まな板の上に置き、包丁の背やすりこぎなどで叩いて刻むこと。六日の夜、または七日の早朝に行う。これには「七草なずな、唐土の鳥が日本の土地へ、渡らぬ先に」などの唱え事を伴った。四方に打つ齋もしどろもどろかな  
一きほひ六日の晩や打齋  
芭蕉『続深川』（寛政三年）  
許六『五老文集』（元禄二年）  
俳諧において、「豆」や「砧」などを打つことについて、「笑う」例がみられる。  
豆をうつ声のうちなる笑かな  
其角（『雑談集』）

#### 〈句解〉

「粥に入れる七草を、暁まで大きな声で囃し立てながら叩いていると、見ていた者に笑われてしまったが、気を取り直してまた齋を打ち続けることだ。」

### ○春05番の発句

土ふまぬ野をなつかしみ若菜哉

文子

#### 〈作者〉

作者の文子については、生没年ほか未詳。『俳諧ひとつ星』（貞享二）・『俳諧松かさ』（元禄七）・『俳諧はり袋』（元禄七）・『菊のちり』（宝永三）などに入集。『続の原』発句の部に四季一句ずつ計四句入集。

#### 〈語注〉

・「若菜」によって、春。「若菜」は、正月七日の七草粥に入れる春の七草の総称。若菜摘みは野遊びのひとつ。  
・「土ふまぬ野」 若菜が生えて、その上を歩くので土を踏まぬ野の意か。  
・「野をなつかしみ」 『古今集』仮名序に挙げられている、山部赤人の和歌「春の野に菫摘みにと来し我ぞ野を懐かしみ一夜寝にける」を踏まえる。

〈句解〉

「草が生えたので、土を踏まずに歩けるようになった春の野をなつかしく思いながら、若葉を摘むことだ。」

○春06番の発句

花はまだ鶯うぐいすぎ聞に上野哉

權花堂  
調柳

〈作者〉

作者の調柳については、生没年ほか未詳。江戸住。種田氏。調和門。芭蕉判「十八番発句合」の作者。『誹諧題林一句』（天和三）・『其俗』（元禄三）などに入集。『続の原』句合の部に、夏二番右句、秋六番左、冬六番左句の三句、発句の部に一〇句入集。

〈語注〉

- ・「花」「鶯」によって、春。「花」は桜のこと。
- ・「上野」 桜の名所として有名であった。

花の雲鐘は上野か浅草か

小僧来たり上野谷中の初桜

芭蕉『続虚栗』（貞享四）

素堂『俳諧江戸広小路』（延宝六）

〈句解〉

「まだ桜は咲いていないのだけれど、鶯の鳴き声を聞きたいと花の名所の上野まで出掛けたことだ。」